

あの頃の僕

中野 和典

あれからもう一〇年経つのかと思うと茫然とする。「あれ」というのは原爆文学研究会が発足されたころのことである。たかが一〇年でこのように回顧するのは時期尚早と思われるかもしれないが、せつかく迎えた一〇年の節目なので、記憶が確かなうちにあのころのことを少し記しておきたい。

私はこの研究会の発足時から事務局長を務めてきたが、その発端となったのは、会の呼びかけ人である花田俊典氏からの依頼であった。二〇〇一年夏のある日、私は福岡市六本松にある喫茶店「カピリア」で花田氏に昼食をこちそうになった。当時二六歳だった私は、その半年前から花田氏のもとで学び始めたばかりの大学院生であり、氏から「中野くんの言っていることは正論なのかも知れないけれど、それだけに中野くんじゃなくても誰かが言うね」とか「……も読んでいないやつは、おれの部屋に入るな」とか「おれさえ納得させられなくて、誰を納得させられるというんだ。おれはだまされないぞ」といった具合に厳しい指導を受けつつ過ぎていた日々のまっただ中だったので、その昼食のときにも自分が少し緊張していたことを憶えている。花田氏は私にとって今も懐かしく、恐い人であり続けている。いわんやその当時をや、である。

花田氏は、日替わりランチを食べながら、その年の秋に発足させ

ようとしている原爆文学研究会の構想について語り始めた（諸般の事情により発足はその年の二月まで延期された）。その構想とは、大学の教員や院生だけではなく、さまざまな人を構成員とする会にする、年に四回の研究会を開く、研究会での発表の要旨を載せた会報を発行する、年に一回雑誌を出して研究会の成果を世に問う、研究会のホームページを作って広く情報を発信する、というものであった。これらは今もすべて研究会の基本方針であり続けている。そのような構想を語った上で、花田氏は、ところで中野くん、研究会の事務局長をやらないか、と言ったのだった。

「事務局長を、ですか？」

「ん、いやなの？」

「いえ、いや、ではないんですが……事務局長というのは、ちょっと……自分に務まるのかな、と思ひまして……」

「いやじゃないなら、引き受けたら。案内状を送ったり、会場の準備をしたり、雑誌を作ったり、そういうのが大事な勉強なんだし、先輩たちもみんなやってきたことなんだから」

「そうですか……じゃあ、ぜひ、やらせてください！」

このような次第で、右も左も分からぬまま私の事務局長生活が始まったのである。ずぶの素人であった私がこれまで事務局の仕事が続けて来られたのは、まったく会員諸氏にご助力いただいたおかげと言うほかない。そのとき私は、花田研究室のホームページの管理人を上村周平氏（本研究会会員）から引き継いだばかりだったので、なんとなくその流れで依頼されたのではなかったかと思っている。

*

*

事務局長として果たした印象深い仕事のひとつに、被爆くすの木2世の苗木を譲り受ける、というものがあつた。機関誌「原爆文学研究」の裏表紙に毎号写真を掲載している、あのくすの木2世の苗木である（本号裏表紙ならびに本号掲載の「総目次」参照）。

これも花田氏の依頼によるもので、「原爆文学研究」第1号の準備を進めていたある日、被爆くすの木2世の写真を雑誌の裏表紙に載せて、毎号大きくなってゆくのを読者に見てもらおうというアイデアを思いついたんだけど、中野くん、誰か譲ってくれる方を知らないか、と私は尋ねられたのだった。被爆くすの木2世とは、一本柱鳥居で有名な山王神社（長崎市）境内にある被爆くすの木の種から育てられたくすの木のことである。どのようないきさつで花田氏が被爆くすの木2世を雑誌の裏表紙に、と考えるようになったのか、今となつては確かめようがない。偶然にも私がかつてお世話になつた方の中に、地元の小・中学生による被爆くすの木の種の採取と育成活動に関わつておられる方がいたので、さっそくご相談した。「ちゃんとしてくれるなら、お譲りしてもいい」という回答をいただいたので、そのむね花田氏に伝えると、うちの庭に植えて育てるから心配ない、とのことであつた。

私は花田氏から託された千鳥饅頭の紙袋を手に、高速バス・九州号に乗つて長崎へおもむき、小さな鉢に植えられた大きさ十七センチほどの被爆くすの木2世の苗木を入れた紙袋を手に、やはり九州号で福岡へ戻つた。花田氏に手渡したとき、苗木は私が自宅であずかつていた数日間水をやり過ぎたせいで弱つてしまつていたのだが、花田氏のご自宅のお庭に植え替えられてからは、またたく間に元を取り戻したとのことだつた。その後、ぐんぐん大

きくなつて、かつて花田氏が思い描いたとおり、毎号雑誌の裏表紙でその成長ぶりを見せてくれている。

雑誌の裏表紙に掲載している被爆くすの木2世の写真は、毎年花書院の仲西佳文氏が撮影してくださつてゐる。本号掲載の「総目次」をご覧いただければよく分かるが、第5号まではくすの木の姿だけがトリミングされており、第6号以降は背景まで写つてゐる。これは第5号のころまで、くすの木の背後にスクリーン（白い布など）を立ててデジタルカメラで写真を撮り、そのあと画像処理ソフトで背景を削除する、という作業をお願いできていたのだが、第6号のころからくすの木があまりに大きくなりすぎて、もはや背後にスクリーンを立てられなくなつたため、やむをえず背景を削除せずに、そのまま掲載するようになったのである。第9号の写真を見れば、もはやくすの木が軒のきより高くなつてゐることが分かるので、その大きさを実感していただけるだろう。

私は花田氏のご自宅を訪れ、見上げるまでに成長したくすの木の姿を見ると、紙袋に入つていたあの小さな苗木がなあ、としみじみ思う。そして、何やら力が湧いてくるのである。くすの木を育て続けてくださつてゐる花田家のみなさまにも、写真を撮り続けてくださつてゐる仲西佳文氏にも心から感謝してゐる。

*

*

会の発足から約二年半後に花田俊典氏が急逝されたとき、この研究会を続けるか否かを会で話し合つたが、結局続けることになつた。私個人としては、会はまだ始まつたばかりであり、まだ何もできていないという思いがあつて、そのことをほかの会員にも告げた。いくつかの報道機関から電話取材を受け、「花田氏の遺

志を継いで研究会を続けるということですね」と尋ねられたが、それは少し違うような気がしたので、そう答えた。結果的には、花田氏の遺志を継いで、ということと変わらないように見えるかもしれないが、遺志を継ぐ、という思いにはとどまらない、もつと内発的な動機が私たちの中にうごめいているように感じられたのである。また、花田氏は、遺志を継ぐ、という気持ちでやるのなら、研究会の存続を望まないだろうとも思った。誰かに寄りかからず、自分の足で立とうとすること、「原爆文学」への問いを自分自身の問いとして引き受けること、それが私が花田氏から学んだ大切な姿勢だったように思われてならない。ややこしい話だが、花田氏の遺志を継ぐ、という立ち位置に立たないことが、氏の遺志を継ぐことになるのではないかと私は考えたのである。

この研究会は、花田氏が急逝されてからすでに七年以上活動を続けてきた。開催した研究会の数は四〇回に近づき、九州以外からの参加者も増えてきている。この一〇年間、花田氏が示した研究会の方針を貫いてきたが、新たな一〇年に踏み出すためには、根本的な変革が必要なのかも知れない。たとえば、事務局を福岡以外の場所に移すとか、研究会の体制や会報・機関誌の形式を刷新するとか。一〇年を契機にこの会を解散して、新たに会を作り直してはどうかという提案もちらほら寄せられている。

しかし、私個人は、これまで続けてきた方針を貫けるころまで貫いてみたいという思いでいる。それは、花田氏が急逝されたときに感じた、会はまだ始まったばかりであり、まだ何もできていない、という思いが私の中に在り続けているからである。もちろん、会のことは、私ひとりの思いでどうなるものではない。あ

るいは二〇周年を待たずに、この会は早々になくなってしまうかもしれない。しかし、まだ何もできていないという私の思いは容易にはなくなれない気がしている。だから、たとえ会がなくなってしまうても、きつと私は「原爆文学」について考え続けることだろう。どうせ考え続けるのなら、私はこの研究会に集った会員諸氏とともに考え続けていきたい。これが今の私の思いである。

原爆文学研究会が発足した二〇〇一年は、九・一一米国同時多発テロが発生した年と重なり、一〇周年を迎えた二〇一一年は、三・一一東日本大震災と福島原発事故が発生した年と重なってしまった。これら二つの出来事と「原爆文学」には何の関係もないという見方も成り立つだろう。しかし、九・一一米国同時多発テロが起こったとき、ビンラディンが原爆を投下して犯罪だと思わない米国は横暴だと「米国の暴力＝原爆」という構図で米国を非難し、対する米国がテロの跡地を「グラウンド・ゼロ」と呼んで「テロの脅威＝原爆」という構図でビンラディンを非難しているのを私は見た（「原爆文学研究会報」第3号巻頭エッセイ参照）。そして、福島原発事故で放出された放射線の量が、広島原爆の：個分として試算され、報じられるのを私は見た。九・一一や三・一一という、私たちに世界認識の変容を迫る重大な出来事は、私たちの世界認識において八・六広島原爆と八・九長崎原爆のイメージが根深く機能し続けていることを露わにする出来事でもあったのである。これだけを見ても、「原爆文学」が決して過去の問題ではなく、私たちの世界認識にかかわる、きわめて現実的（アクチュアル）な問題であり続けていることは明らかだろう。

原爆文学研究会一〇年、私たちの会はまだ始まったばかりである。